

英語学習者のエッセイにおける *I think I will* と *I think I want to* の多用 — 日本語の「ようと思う」と「たいと思う」の用法から考える —

金沢 じゅん

東京大学大学院博士課程 〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

E-mail: jun-kanazawa347@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

あらまし 日本語を母語とする初級・中級の英語学習者のエッセイでは *I think I will* や *I think I want to* という表現が散見される。これらの表現は非文法的ではないものの、*I think* を付ける必要はなく、冗長な印象を与えてしまう。本稿では、英語母語話者と日本語を母語とする英語学習者の *I think I will* と *I think I want to* の使用傾向を比較し、日本人英語学習者が *I think I will* と *I think I want to* を頻用しがちであること、また、その背景に母語である日本語の「ようと思う」と「たいと思う」の用法の影響があることを実際のコーパスやデータに基づき明らかにする。そして、英語教育において母語である日本語の表現の用法に対する認識を促すことの重要性を指摘する。

キーワード エッセイ・ライティング, *I think I will*, *I think I want to*, 「ようと思う」, 「たいと思う」

The Overuse of *I Think I Will* and *I Think I Want to* in Essays of L2 English Learners

— Comparison with Japanese *Yoo To Omou* and *Tai To Omou* —

Jun KANAZAWA

¹ Graduate Student at the University of Tokyo 3-8-1 Komaba, Meguro-ku, Tokyo, 153-8902 Japan

E-mail: jun-kanazawa347@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

Abstract This paper examines Japanese learners of English as a second language (L2) overuse *I think I will* and *I think I want to*. In essays, L2 English learners often and redundantly use *I think I will* and *I think I want to*, which are rarely used by English native speakers. This is because they directly translate to English the commonly used Japanese expressions *yoo to omou* and *tai to omou*. Awareness of the usage of Japanese expressions can enhance English learning and prevent redundancy.

Keywords Essay writing, *I think I will*, *I think I want to*, *yoo to omou*, *tai to omou*

1. はじめに

日本語を母語とする英語学習者のエッセイでは *I think* が多用されることが報告されている (e.g., Natsukari, 2012; 西谷・中崎・ダンテ, 2016; 成田, 2017; 石川, 2019)。特に、初級・中級学習者のエッセイでは、(1)と(2)の下線部のように *I think I will* や *I think I want to* という表現が用いられることがある^[注1]。

(1) *I think I will* bring my graduate album of elementary school.

I really like my friends of elementary school, but I can't meet them so often now.

So that's why the album is so special for me.

(JEFLL_01804_Earthquake)

(2) *I think I want to* take things that I can't buy with money. For example ... my diary, my (study) notebooks, letters from my friends, and so on. I think I can buy my other treasures again if lost ... such as my guitar, my stereo set, my books. But I can't buy written things again.

(JEFLL_05267_Earthquake)

(1)と(2)は、日本人中高生のライティング・コーパス (JEFLL Corpus) からの引用であるが、「大地震が来たら何を持って逃げますか？」というテーマに対する答えを主張する際に *I think I will* と *I think I want to* が用いられている。

しかし、*I will* と *I want to* はそれ自体が「私」の意

金沢じゅん, “英語学習者のエッセイにおける *I think I will* と *I think I want to* の多用 — 日本語の「ようと思う」と「たいと思う」の用法から考える —”, 言語学習と教育言語学 2022年度版, pp. 1-8, 日本英語教育学会・日本教育言語学会合同編集委員会編集, 早稲田大学情報教育研究所発行, 2023年3月31日

Copyright © 2022-23 by Kanazawa, J. All rights reserved.

志や希望であることを示すため、*I think* を付加する必要はなく、冗長な印象を与えてしまうという（西谷・中崎・ダンテ, 2016）。実際、英語母語話者の文章では、これらの表現はほとんど用いられない（詳細は第4節で分析する）。それにも関わらず、日本人英語学習者のエッセイではこれらの表現が頻用されるのである。

英語の *I think I will* と *I think I want to* に対応する日本語の表現に、(3)の下線部の「ようと思う」や(4)の下線部の「たいと思う」がある^[注2]。

(3) 父も他界し、今は私一人だけれど、両親への恩返しにしっかり生きていこうと思う。

(2016/02/22「思い出胸に ひな飾り」)

(4) 当然のように思っていたが、苦労がわかった。母への感謝を忘れず、手伝いたいと思う。

(2016/03/08「母の苦労に感謝」)

(3)の下線部は書き手の意志を表す「よう」に「と思う」が後接した表現であり、(4)の下線部は書き手の希望を表す「たい」に「と思う」が後接した表現である。日本語の文章では「ようと思う」や「たいと思う」が多用されることが指摘されていることから（金沢, 2022）、日本人英語学習者の *I think I will* と *I think I want to* の多用は日本語の「ようと思う」と「たいと思う」の用法の影響を受けていることが推測される。

先行研究では、日本語を母語とする英語学習者が *I think* を多用する背景に母語である日本語の「と思う」の用法の影響があることが指摘されているが、*I think I will* と *I think I want to* の使用に焦点を当てた研究や、日本語の「ようと思う」と「たいと思う」との関連を分析した研究はない。そこで、本稿では、(5)の三つの観点から分析・比較することで、日本語を母語とする英語学習者が *I think I will* と *I think I want to* を多用しがちであることを、また、その背景に母語である日本語の「ようと思う」と「たいと思う」の用法の影響があることを論じる。

- (5) a. 英語母語話者の *I think I will* と *I think I want to* の頻度と用法
b. 日本語を母語とする初級・中級の英語学習者の *I think I will* と *I think I want to* の頻度と用法
c. 日本語母語話者の「ようと思う」と「たいと思う」の頻度と用法

そして、初級・中級のライティング教育における *I will* と *I want to* の教授・習得には母語である日本語の表現の用法の理解が役立つことを提案したい。

本稿の構成は以下の通りである。まず2節で *I think*

および *I think I want to* と *I think I will* に関する先行研究について紹介し、3節で分析に使用したデータや分析対象について述べる。4節で(5)のそれぞれの分析結果について述べ、それらを比較する。最後に5節で本稿のまとめを記す。

2. 先行研究

2.1. 英語の *I think* および *I think I want to* と *I think I will* に関する先行研究

まず、英語の *I think* および *I think I want to* と *I think I will* の先行研究を概観したい。*I think* は話し言葉における分析が中心に行われており、補文標識 *that* の有無によって二つの構文があることが指摘されている（Aijmer, 1997）。Aijmer は、(6)のように、*I think* が挿入句的に用いられ、*I think* の補文節を導く *that* がいない場合、*I think* は不確実性を表したり、主張の強さを弱めたりする対人的機能を持つという。この用法は tentative *I think* と呼ばれる。

(6) but he also sold that business

since

he sold that business

I think that was sold for another quarter of million.

(Aijmer, 1997: 22)

Aijmer によれば、話し言葉では(6)のような tentative *I think* が用いられることが多いという。

一方で、(7)のように、*I think* の後ろに補文標識である *that* を伴う補文節が続き、プロソディの際立ちがある場合、*I think* は主張を強調したり、確信を与えたりする機能があるという。この用法は deliberative *I think* と呼ばれる^[注3]。

(7) yes yes

I thi \nk th \at

the boys had all had an advantage

先行研究では *I think* に関する分析はなされているものの、*I think I will* や *I think I want to* に焦点を当てた分析はない。しかし、*I think* の先行研究の中でこれらの表現に言及されていることがあった。

例えば、*I think I will* は Virdis (2009) の *I think* の分析の中で取り上げられている。(8)はドラマ *Desperate Housewives* の一場面で、Rex が Bree に離婚を切り出しているところである。

(8) Rex: I want a divorce. I just can't live in this ...this detergent commercial anymore.

Waiter: The salad bar's right over there, help yourself.
 Rex: Thank you.
 Bree: Um, ***I think I'll*** go get your salad for you.
 [...]
 Bree: Okey, well I got you the honey mustard dressing. The ranch looked just a little bit suspect.

(Virdis, 2009: 240-241)

Rex は、離婚の提案に対する Bree の反応を窺っているが、Bree は離婚について触れたくなく、その話題を避けるために遠慮がちにサラダを取りに行く。その際に ***I think I'll*** が用いられている。

また、***I think I want to (I think I'd like to)*** に関しては、Kaltenböck (2010) の ***I think*** の分析の中で言及されている。Kaltenböck によれば、(9)の ***I think*** は主張を和らげるために用いられているという^[註4]。

(9) ***I think*** <,> ***I'd like to*** answer that a slightly different way.

(Kaltenböck, 2010: 243)

(8)と(9)を見てみると、***I think I will*** と ***I think I want to*** は相手に対して遠慮がちに自身の行為を申し出たり、主張を弱めたりする際に用いられるようである。しかし、これらの表現が実際にどのような文脈で、どの程度用いられる傾向にあるのかについては明らかにされていない。

2.2. 日本語を母語とする英語学習者の ***I think*** の多用に関する先行研究

次に、日本語を母語とする英語学習者の ***I think*** の多用に関する先行研究を見ていきたい。先述の通り、日本人英語学習者のエッセイでは ***I think*** が多用されることが報告されている (e.g., Natsukari, 2012; 西谷・中崎・ダンテ, 2016; Okugiri, Ijuin, & Komori, 2017; 成田, 2017; 石川, 2019)。

西谷・中崎・ダンテ (2016) は、日本人の大学生が記述する英語には、(10)のような ***I think*** の使用例が見受けられると指摘する。

(10) a. ***I think*** I will go there many times.
 b. ***I think*** I want to go to Yoshima again.
 c. ***I think*** he must feel tired.
 d. ***I think*** learning English is important.

(西谷・中崎・ダンテ, 2016: 1)

(10)の表現に関して英語を母語とする外国人教員へ

のアンケートを行ったところ、(10)の ***I think*** はどれも意味的に冗長な印象を与えるという結果が得られた。アンケートによれば、(10a)から(10c)の文は、書き手の意志、願望、推測を表す文であるが、それぞれ文中の ***I will***、***I want***、***must*** がその意味を担っており、文頭にあえて ***I think*** を付加する必要はないという。また、(10d)は、英語を学ぶ重要性を主張する文であるが、***I think*** が意図せずに主張の強さを弱めているという。

Okugiri, Ijuin & Komori は、日本語を母語とする英語学習者と英語母語話者 (ともに大学生) のエッセイを比較し、***I think*** の使用の差異を明らかにした。英語を母語とする大学生は、(11)のように、自身の個人的な経験を説明したり、情報が不確定であることを示したりするために ***I think*** を使用する傾向がみられた。

(11) a. ***I think*** my preference stems from my childhood.

b. ***I think*** this will become a very niche, specialised market in the near future.

(Okugiri, Ijuin, & Komori, 2017: 166)

一方で、日本語を母語とする英語学習者の大学生は、(12)のように、自分の意見を述べる際に ***I think*** を用いることが多いという。

(12) ***I think that*** newspapers and magazines are still important and a necessary in future.

(Okugiri, Ijuin, & Komori, 2017: 166)

西谷・中崎・ダンテや Okugiri, Ijuin, & Komori は、日本語を母語とする英語学習者が ***I think*** を多用する背景には、母語である日本語の「と思う」の用法の影響があることを指摘する。しかし、***I think I will*** と ***I think I want to*** に焦点を当てた研究や、これらの表現と日本語の「ようと思う」と「たいと思う」との関連を分析した研究はなされていない。

3. 分析に用いたデータと分析対象

先述の通り、本稿では(5)の三つの観点について明らかにするが ((5)は再掲)、ここで、分析に用いたコーパスとデータ、および分析対象について述べたい。

(5) a. 英語母語話者の ***I think I will*** と ***I think I want to*** の頻度と用法
 b. 日本語を母語とする初級・中級の英語学習者の ***I think I will*** と ***I think I want to*** の頻度と用法
 c. 日本語母語話者の「ようと思う」と「たいと思う」の頻度と用法

(5b)の分析には、日本人中高生のライティング・コーパス (JEFLC Corpus) を用いた。JEFLC Corpus は日本の中学・高校の英語学習者のエッセイのコーパスであり、そのテーマは(13)の六つからなる(投野編, 2007)。(13a)から(13c)は自分の意見を論理的に述べるように、(13d)から(13f)は物語や自分が経験したことを記述的に述べるように意図されている。

- (13) a. 朝ごはんはパンがいいかご飯がいいか?
 b. 大地震が来たら何を持って逃げますか?
 c. 今年のお年玉の使い道は? その理由は?
 d. あなたの学校の文化祭について教えてください。
 e. 浦島太郎のその後について想像してください。
 f. 今までに見た怖い夢について教えてください。

(5a)と(5c)の分析には、新聞の投書記事を用いた。投書は新聞の読者が書き手となり、時事ニュースなどの話題について意見を主張する文章である。具体的には、(5a)の英語の分析には *New York Times* の投書のデータを、(5c)の日本語の分析には『読売新聞』の投書のデータを用いた。*New York Times* の投書 (letters to the editor) は、オンライン・データベース Lexis を用いて、紙面に印刷されたバージョンを収集した。また、『読売新聞』の投書は、読売新聞記事データベース『ヨミダス歴史館』を用いて、東京版・朝刊の「気流」欄に掲載されたものを収集した。期間は、ともに 2015 年 1 月 1 日から 2019 年 12 月 31 日の五年間である。

表 1 は JEFLC Corpus および日英の投書の総文書数と延べ語数、および一文書あたりの平均語数をまとめたものである。なお、日英投書のデータの延べ語数の集計にはテキストマイニングツールの KH Coder を使用した。

表 1 分析に用いたコーパスとデータの概要

コーパス とデータ	総文書数	延べ語数	一文書 あたりの 平均語数
JEFLC Corpus	10,038	669,304	66.68
<i>New York Times</i>	15,397	2,527,176	164.13
『読売新聞』	9,135	1,701,151	186.22

最後に、分析対象について説明したい。(5a)と(5b)の英語の分析では、文頭で用いられる *I think I will* と *I think I want to* を分析対象としている^[註5]。なお、前者には、*I think that I will*、*I think I'll*、*I think that I'll* を含め、後者には *I think that I want to* を含めている。

(5c)の日本語の分析では、文末で用いられる「よう

と思う」と「たいと思う」(普通体のみ)を分析対象とした。

4. 分析

本節では、(5)のそれぞれの分析結果を述べていく。まず、4.1 で英語の投書における *I think I will* と *I think I want to* の出現傾向を、4.2 で日本語を母語とする英語学習者の *I think I will* と *I think I want to* の出現傾向を明らかにする。そして、4.3 で日本語母語話者の「ようと思う」と「たいと思う」の出現傾向を述べ、4.4 でこれらの分析結果を比較する。

4.1. 英語の投書における *I think I will* と *I think I want to* の頻度と用法

英語の投書における *I think I will* と *I think I want to* の実際の出現傾向を見ていきたい。表 2 と表 3 は、*New York Times* における *I think I will* と *I think I want to* の頻度をまとめたものである。なお、本稿では、単純な出現頻度を粗頻度、それぞれの表現の 10 万語あたりの平均語数を相対頻度として示している。

表 2 *New York Times* における *I think I will* の頻度

表現	粗頻度	相対頻度
<i>I think I will</i>	0	0.00
<i>I think I'll</i>	1	0.04
<i>I think that I will</i>	0	0.00
<i>I think that I'll</i>	0	0.00
合計	1	0.04

表 3 *New York Times* における *I think I want to* の頻度

表現	頻度	相対頻度
<i>I think I want to</i>	0	0.00
<i>I think that I want to</i>	0	0.00
合計	0	0.00

表 2 と表 3 によれば、五年間に及ぶ投書のデータの中で *I think I'll* が一件のみ、*I think I want to* に至っては一件も見られなかった。このことから、これらの表現は英語の投書ではほとんど用いられないことが分かる。

(14)は英語の投書において唯一観察された *I think I'll* の例である。この記事では *New York Times* に掲載された Jeffrey Tuchman 氏の追悼記事に対する苦言が述べられている。(14)によれば、*The Man From Hope* という映画の制作の大部分は筆者自身が担ったにも関わらず、追悼記事ではまるで映画の一番の功労者が Tuchman 氏であるかのように書かれているという。

(14) ...Mr. Tuchman was a talented filmmaker who

deserves his own recognition for an illustrious career. But as for “The Man From Hope,” I’m pretty sure I remember coming up with the title, the concept and the story line, using my own film crew, personally conducting every interview, choosing every photograph, writing every line of scripted dialogue (including Bill Clinton’s narration), selecting every music cue and editing every frame. ... So if no one minds, I think I’ll keep “The Man From Hope,” the one that started it all, in my basket. And I feel confident that Mr. Tuchman would be the first to insist on it.

(The Woman Behind ‘The Man From Hope.’ Sep. 22, 2017)

(14)の書き手は、映画の成功の影には女性（である筆者）の功績があることを主張する。具体的には、映画の大部分は自身と自身のスタッフによって制作されたことを指摘し、下線部において、この映画は自分のものだと述べる。その際、*if no one minds*, という表現とともに *I think I’ll* が用いられている。映画の功績を自分のものであると主張することは、読み手からの否定的な反発を招く恐れがある。そこで、*I think I’ll* は読み手への配慮を示し、書き手が遠慮がちに主張を述べているという印象を与える。

以上から、英語母語話者は *I think I will* と *I think I want to* をほとんど使わず、使う場合でも読み手に配慮や遠慮を示す場合に限定されていることが分かる。

4.2. 日本語を母語とする英語学習者の *I think I will* と *I think I want to* の頻度と用法

次に、日本語を母語とする英語学習者の *I think I will* と *I think I want to* の出現傾向について述べたい。JEFLL Corpus におけるそれぞれの表現の頻度は表 4 と表 5 の通りであった。

表 4 JEFLL Corpus における *I think I will* の頻度

表現	粗頻度	相対頻度
<i>I think I will</i>	35	5.23
<i>I think I’ll</i>	18	2.69
<i>I think that I will</i>	10	1.49
<i>I think that I’ll</i>	2	0.30
合計	65	9.71

表 5 JEFLL Corpus における *I think I want to* の頻度

表現	粗頻度	相対頻度
<i>I think I want to</i>	11	1.64
<i>I think that I want to</i>	7	1.05
合計	18	2.69

表 4 と表 5 を見ると、英語の投書の場合と比べて、日本語を母語とする英語学習者のエッセイでは *I think I will* と *I think I want to* が多用されていることが分かる。また、*I think I want to* よりも *I think I will* の方がより頻用されている。

それぞれの表現の具体例を見てみよう。

(15) [大地震が来たら何を持って逃げますか?]

I think I will bring pets and 貯金通帳 Why? Because, First, I don’t have brother and sister だから pets are my 大切な family. I will bring it.

(JEFLL_02923_Earthquake)

(16) [今年のお年玉の使い道は?その理由は?]

I have bought nothing by my otoshidama. But *I think I want to* buy a dictionary of electricity. I bought one before. It is a high quality and it is useful very much at home. However, it’s big and heavy. Therefore I want to buy new one that is light and small.

(JEFLL_7336_otoshidama)

(15)の「大地震が来たら何を持って逃げるか」と(16)の「今年のお年玉を使い道は何か」というテーマは書き手の個人的な意志や希望を尋ねるものであり、読み手からの否定的な反発を招く可能性も少ない。したがって、読み手に配慮を示したり、遠慮がちに意見を主張したりする必要はない。それにも関わらず、(15)と(16)ではこれらのテーマに対する答えを端的に述べる際に *I think I will* と *I think I want to* が用いられている。

4.3. 日本語の投書における「ようと思う」と「たいと思う」の頻度と用法

さらに、日本語の投書における「ようと思う」と「たいと思う」の出現傾向について述べたい。先述の通り、英語の *I think I will* と *I think I want to* に対応する日本語の表現に「ようと思う」と「たいと思う」がある^[註6]。そして、「ようと思う」と「たいと思う」は投書において多用されることが指摘されている(金沢, 2022)。

金沢は、日本語の投書における文末の「と思う」を分析し、意志の「よう」と希望の「たい」が単独で用いられる文脈と「ようと思う」と「たいと思う」が用いられる文脈が異なることを指摘した。

例えば、「よう」と「たい」は、(17)と(18)のように、書き手の独話のような文脈で用いられていた。

(17) (前略) 職場に自分の傘を忘れてきたため、とっさに(孫が生まれる前に亡くなった)父の傘を手にとり、子どもの手を引いて保育園へと急いだ。道中、ふと傘を持つ手に温かさを感じた。私を介して父

が、孫の手を握っているような感覚がしたのだ。そういえば父は、「俺が保育園に連れていくんだ」と張り切っていたっけな。また雨の日の送迎は、父の傘を使おう。この子が大きくなって、じいじの傘を使ってくれるといいな。それまで壊れないといいけど。

(2017/06/04「子の送迎 じいじの形見で」)

(18) 7年前に夫を亡くし、ふさぎ込むより何か新しいことをと始めたマラソンが元気のもとになっている。(中略)なんと「女子 60 歳以上」で 4 位。メダルを手に、これまで頑張ってきた良かったとしみじみ思った。夫からのごほうびかな。これからも走り続けたい。

(2015/12/16「マラソン続け ごほうびかな」)

(17)の点線部の「張り切っていたっけな」「使ってくれるといいな」「使ってくれるといいな」や、(18)の点線部の「ごほうびかな」は独り言的な表現であり (Hasegawa, 2010)、「よう」と「たい」を伴う下線部の文は、これらの独り言的な表現の前後に出現している。投書は読み手に向けて書かれたものであり、純粋な独り言にはなり得ない。しかし、(17)と(18)のように、読み手を想定した文章の中で独り言の表現が用いられると、あたかも書き手の心の中の想いや本音そのまま吐露されたかのような印象を与えることが可能となる (野田, 2006)。

一方で、「ようと思う」と「たいと思う」は(19)や(20)のように、読み手に働きかける文脈に出現していた。

(19) (前略) 着物は美しい姿勢でなければ、美しく着られないという。そこが着物を着る上で難しいことだが、習い始めた頃は何も分からなかった私も、最近では背筋を意識して着付けをすることができるようになった。今年は着物を着て、夏祭りや花火大会に出かけてみようと思う。皆さんも着物を着て、和の心を感じてみてはいかがですか。

(2017/06/29「美しい姿勢で和の装い」)

(20) (前略) 喪中のはがきの返事にクリスマスカードを出している、という投書(11月26日)を読んだ。私もまねてみようかと雑貨店に行った。目上のあの人にはこのカード、などと選ぶのも楽しかった。これからはクリスマスカードを利用し、やり取りを続けたいと思う。素晴らしいアイデアをありがとうございました。

(2017/12/07「喪中にカード まねたい」)

(19)の点線部では、読み手を指す「皆さん」とともに「いかがですか」という読み手に働きかける表現が

用いられているが、その直前の下線部の文に「ようと思う」が現れている。また、(20)の点線部では、11月26日の投書に対する感謝の言葉が述べられているが、その直前の下線部に「たいと思う」が出現している。このことから金沢は、「ようと思う」や「たいと思う」は、読み手への働きかけが強い文脈で用いられ、読み手に向けて書き手の意志や決意を宣言していることを示すように機能すると指摘した。

日本語では独り言的な発話と対話的な発話を形態的に区別することが可能であり^[注7]、対話場面においてもあえて独り言的な表現が用いられることがある (Hasegawa, 2022)。投書では、独り言的な表現である「よう」と「たい」は、書き手の本音を吐露するような印象を与えるが、「と思う」を後接するとその印象は打ち消され、読み手に向けて伝えているという対話性が生じるのである。

金沢の分析に基づいて「ようと思う」と「たいと思う」の頻度を集計したものが表6である^[注8]。

表6 投書における「ようと思う」と「たいと思う」の頻度

表現	粗頻度	相対頻度
ようと思う	65	3.82
たいと思う	100	5.88

表6をみると、日本語の投書ではどちらの表現も多用されていることが分かる。また、「ようと思う」よりも「たいと思う」の方がより頻出する傾向にあった。

4.4. 日英比較と結論

最後に、今まで論じてきた分析結果を整理したい。表7は英語の投書と日本人英語学習者の *I think I will* の頻度と日本語の投書の「ようと思う」の頻度をまとめたものである。また、表8は英語の投書と日本人英語学習者の *I think I want to* の頻度と日本語の投書の「たいと思う」の頻度をまとめたものである。

表7 *I think I will* と「ようと思う」の頻度

データ	粗頻度	相対頻度
<i>New York Times</i> (<i>I think I will</i>)	1	0.40
<i>JEFL Corpus</i> (<i>I think I will</i>)	65	9.71
『読売新聞』 (「ようと思う」)	65	3.82

表 8 *I think I want to* と「たいと思う」の頻度

データ	粗頻度	相対頻度
<i>New York Times</i> (<i>I think I want to</i>)	0	0.00
<i>JEFLC Corpus</i> (<i>I think I want to</i>)	18	2.69
『読売新聞』 (「たいと思う」)	100	5.88

表 7 と表 8 から、*I think I will* と *I think I want to* は英語の投書ではほとんど用いられない一方で、日本語を母語とする英語学習者のエッセイでは多用されていることが分かる。また、日本語の投書においても「ようと思う」と「たいと思う」が頻用される傾向にある。以上から、英語母語話者に比べて、日本語を母語とする英語学習者は *I think I will* と *I think I want to* を頻用しがちであり、その背景には、母語である日本語の「ようと思う」と「たいと思う」の用法の影響があることが考えられる。

日本語の「ようと思う」と「たいと思う」は、書き手が意見を主張する際に頻繁に用いられる表現である。そして、「と思う」の付加は、(19)と(20)のように、独話的な印象を打ち消し、読み手に向けた決意の表明であることを示す。つまり、読み手へ働きかける力を強めるのである。そのために、日本語を母語とする英語学習者は読み手の存在を意識し、読み手に向けて自身の意志や希望を伝えようとする際に *I think* を付加してしまうと考えられる。しかし、英語では独話の表現と対話の表現を形態的に区別しないため、*I will* と *I want to* だけでも独話的な響きはなく、逆に *I think* の付加が不自然な印象を与えてしまう。したがって、(1)(2)(15)(16)の日本語を母語とする英語学習者のエッセイでは、(1')(2')(15')(16')のように *I think* を削除し、*I will* と *I want to* だけを用いる方が英語としてはより自然になるのである。

- (1') ~~*I think I will*~~ bring my graduate album of elementary school. I really like my friends of elementary school, but I can't meet them so often now. So that's why the album is so special for me.
- (2') ~~*I think I want to*~~ take things that I can't buy with money. For example ...
- (15') ~~*I think I will*~~ bring pets and 貯金通帳 Why? Because, First, I don't have brother and sister だから pets are my 大切な family. I will bring it.

(16') I have bought nothing by my otchidama. But ~~*I think I want to*~~ buy a dictionary of electricity.

5. おわりに：英語教育への示唆

日本語を母語とする英語学習者が *I think* を多用することは多くの先行研究でも指摘されている現象であるが、*I think I will* と *I think I want to* に焦点を当てた研究や、「ようと思う」と「たいと思う」との関連を分析した研究はなされていなかった。そこで、本稿では、英語母語話者と日本人英語学習者の *I think I will* と *I think I want to* の出現傾向を比較することで、日本人英語学習者が *I think I will* と *I think I want to* を多用する傾向にあることを示し、さらに、日本語母語者の「ようと思う」と「たいと思う」の出現傾向とも比較することで、日本人英語学習者の *I think I will* と *I think I want to* の多用は、母語である日本語の「ようと思う」と「たいと思う」の用法の影響があることを論じた。

日本人英語学習者が頻用する *I think I will* と *I think I want to* という表現は不自然な印象や遠慮がちなトーンを与えるため、エッセイ全体の説得力を著しく損なう恐れがある。しかし、単に *I think* の使用を控えるように指摘するだけでは、学習者の納得感を得ることは難しいだろう。そこで、母語である日本語の表現の仕組みから理解することで、適切な言語使用への理解や、自分の意見を英語で効果的に主張するスキルの習得を促すことが期待できる。

本稿では学習者のエッセイと投書を比較したが、語られるテーマによってそれぞれの表現の頻度も変動することが予想される。特に、4 節では日本人英語学習者のコーパスでは *I think I will* の方が多く用いられる一方で、日本語の投書では「たいと思う」の方が多く用いられるという結果が得られたが、この差はテーマや話題の違いに影響を受けていることが予想される。今後は、エッセイのテーマを統一した上で日英それぞれの表現の頻度を比較することでより精緻な分析を行う必要がある。

注

1. 例文の表記について明記しておきたい。以下、例文における下線と点線、および太字や斜体は筆者が追加したものである。なお、*JEFLC Corpus* の引用では英語の誤字は原文のまま掲載しているが、学習者には英語が分からない場合に日本語の使用を認めているため、所々日本語やローマ字が含まれる場合がある。
2. *New York Times* と『読売新聞』からの引用に限って、日付とタイトルのみを例文中に表記する。
3. Aijmer (1997: 22) から *I think that* の部分の韻律

記号だけ残して引用した。なお、「\」は下降調を表す。

4. 「<,>」は short pause を表す。
5. *I think* の挿文の *that* を取るか否かで構文が異なるという指摘があるが (Aijmer, 1997)、本稿では両者を区別せずに収集した。
6. なお、*I think I will* に対応する日本語には、(a)の下線部のような「すると思う」という表現もある。しかし、日本語の投書では「すると思う」を用いて書き手の未来の行動を明示する例は見受けられなかったため、分析対象には含めていない。

(a) 今年は海外旅行を すると思う。

日本語の投書では、話題に対する書き手の未来へのスタンスを示す場合には、「ようと思う」や「たいと思う」が頻用されていた。しかし、日本語を母語とする英語学習者のエッセイにおける *I think I will* の使用には、(a)の「すると思う」の用法からの転移である可能性があるという点には留意しておきたい。

7. 長谷川 (2017) は、日本語では独り言的な表現と対話的な表現には形態的なずれが見られると指摘する。例えば(b)では、「あ、そう。」や「あ、そうなの。」という表現はより対話的であり、「あ、そうなんだあ。」や「あ、そうか。」という表現はより独り言的である。

(b) あ、そう。
あ、そうなの。
あ、そうなんだあ。
あ、そうか。

8. 金沢 (2022) では 2015 年から 2017 年の三年分の投書の分析であったが、本稿では 2018 年から 2019 年の二年分を追加し、五年分の投書を調査した。

文 献

- Aijmer, K. (1997). *I think* — an English modal particle. In T. Swan & O. J. Jansen (Eds.) *Modality in Germanic languages: Historical and comparative perspectives* (pp.1-47), Gruyter.
- Hasegawa, Y. (2010). *Soliloquy in Japanese and English*. John Benjamins.
- 長谷川葉子 (2017) 「三層モデルによる独り言の分析」 廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子編『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』 pp.26-43, 開拓社.
- Hasegawa, Y. (2022). The Metapragmatic speech-style shift in Japanese: From the telling mode to the showing mode, In C. Shei, & L. Saihong (Eds.), *The Routledge handbook of Asian linguistics* (pp.321-338), Routledge.
- 石川慎一郎 (2019) 「英語学習者コーパス研究の現状と課題」『電子情報通信学会 基礎・境界ソサイエティ Fundamentals Review』 12(4), 280-289.
- 金沢じゅん (2022) 「新聞投書における文末の「と思う」の機能」『日本語文法』 23(1), 121-137.
- Kaltenböck, G. (2010). Pragmatic functions of parenthetical *I think*. In G. Kaltenböck, W. Mihatsch, & S. Schneider (Eds.), *New approaches to hedging*, (pp.243-72), Brill.
- 成田真澄 (2017) 「日本人大学生が産出した文における主格人称代名詞出現傾向の分析」『東京国際大学論叢 人文・社会学研究』 2, 1-20.
- Natsukari, S. (2012). Use of *I* in essays by Japanese EFL learners. *JALT Journal*, 34(1), 61-78.
- 西谷工平・中崎 崇・ダンテ ローレンス (2016) 「日本語から英語への機械的置換が産出する英語での意味的冗長性: 「と思う」と *I think* を例に」『教育実践学研究』 18(1), 1-9.
- 野田春美 (2006) 「擬似独話が出現するとき」 益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平 2 文論編』 pp.193-213, くろしお出版.
- Okugiri, M., Ijuin, I., & Komori, K. (2017) The overuse of *I think* by Japanese learners and *to-omou/to-kangaeru* by English learners in essay writing. *Proceedings of PacSLRF 2016*, 163-168.
- 投野由紀夫編 (2007) 『日本人中高生一万人の英語コーパス—中高生が書く英文の実態とその分析—』, 小学館.
- Virdis, D. F. (2009). Polite Interaction or Cooperative Interaction? Bree's Conversational Style in ABC's Desperate Housewives. *BAS British and American Studies*, 15, 237-251.

本稿は、日本英語教育学会・日本教育言語学会第 52 回年次研究集会にて口頭発表したものに加筆・修正を加えたものである。本稿の執筆にあたり査読者の方々から丁寧かつ貴重な教示をいただいた。記して心より感謝申し上げる。